

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

2019年 8月 1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究所

職 名・学 年 博士後期課程3回生

氏 名 真鍋 公希

助成の種類	2019年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	2019年IAMCR国際メディア・コミュニケーション研究学会	
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発表題目	Quantitative Analysis of Japanese films in 1950s	
開催場所	スペイン マドリード・コンプテセ大学	
渡航期間	2019年 7月 6日 ~ 2019年 7月 11日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(サーティフィケート)	
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円
	使用した助成金額	300,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	交通費： 150,000円
		宿泊費： 60,000円
		参加登録費： 40,000円
資料作成費： 50,000円		
		(端数切捨て)
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)	

成果の概要／真鍋公希

7月6日から11日にかけて、マドリード・コンプテセ大学で行われた2019年IAMCR国際メディア・コミュニケーション研究学会にて、“Quantitative Analysis of Japanese films in 1950s”と題した口頭発表を行いました。飛行機の予約の関係上、学会の最終日は参加できませんでしたが、それ以外は開催期間中すべての日程に参加し、多くの研究発表を拝聴したり、海外の研究者の方と交流する時間をもったりと、充実した時間を過ごすことができました。また、自身の口頭発表も滞りなく進めることができ、フロアからの質疑の時間やセッションが終わった後には、数名の方とさまざまな意見交換ができました。こうした経験から得られた成果について、4点にまとめて報告いたします。

第一に、今回の発表内容について、海外の研究者と有益な意見交換ができました。とくに、現代の中国映画を対象として同じように計量分析を行っている研究者から、研究をさらに発展させられる有益な指摘をいただくとともに、もっとも関連性が高く投稿先として適切なジャーナルも紹介してもらいました。日本の映画研究の分野では、計量分析に専門的に取り組んでいる研究者がほとんどいないために、映画史的な知識と分析方法の両方を踏まえたコメントをもらう機会がこれまで乏しく、また、国内の査読誌はいずれも主に扱っている領域が異なるために、報告をもとにした論文をどこに投稿するのかも迷っていたところでしたので、上記のようなコメントをもらえたことは、今後の研究に直接つながる大変有意義な成果だといえます。早速ですが、現在、いただいたコメントを精査しながら、発表原稿の修正と投稿準備を進めているところです。

第二に、映画を対象として計量分析を行っている研究者と交流できたことで、大いに刺激を受けることができました。先述のとおり、映画を対象に計量分析的なアプローチを専門に行っている研究者がほとんどいませんので、自分の取り組んだ研究がどのくらいインパクトのあるものか、報告前はあまり自信をもてずにいました。しかし、今回の口頭発表後には、何人かの若手研究者の方から、「批評家による評価と経済的な成功の度合いが反比例するような関係にはないという結論は興味深かったので、論文が出版された際には連絡してほしい」という旨を仰っていただけたため、研究内容に自信をもつことができました。また、その若手研究者の方々と休憩時間にお互いの研究状況などについても話し合い、関心をもっているテーマや研究を進めていくなかで抱えている悩みについても共有できました。些細なことではありますが、こうした交流からも研究のモチベーションにつながる刺激を得ることができました。

第三に、海外のほかの研究者の報告を聞いたり交流をしたりする中で、映画研究やメディア論の分野の世界的な研究トレンドを知ることができました。日本映画を専門としていることもあり、これまではジャーナルに掲載された論文をある程度フォローするのみで、世界的な研究トレンドに対してあまり注意を払っていませんでした。しかし、今回の学会参加を通して、自分の研究にも活かせるような研究トレンドを知ることができ、視野を大きく広げることができました。こ

して視野を広げることができたのも、大規模な国際学会である国際メディア・コミュニケーション研究学会に参加できたからこそだと思います。

第四に、私にとっては英語での口頭発表自体が初めてでしたので、実際に英語発表を経験できたこともまた、とてもいい経験となりました。とくに、今回の学会参加は単身で、発表の際にフロアに日本語話者もいないという状況でしたが、それでも大きな失敗なく発表をやり遂げることができたことで、以前に抱いていた英語発表に対する苦手意識をずいぶんと克服できたように思います。これからは、より積極的に国際学会や国内の英語発表に取り組みたいと前向きに思えるようになった点でも、自身の成長を感じることができました。

以上のように、今回の学会参加では研究内容にかかわる面はもちろん、研究のモチベーションや苦手意識のような心理的な面でも得るものが多く、その意味で貴重な経験ができました。スペインという遠方での開催ということで、普段であれば参加をあきらめざるを得なかったでしょうから、貴財団より助成を受け、発表する機会を得ることができたのは、私にとって大変幸運なことでした。改めて感謝申し上げます。